



木山寺の山林整備と維持も兼ねた古道トレイルはマウンテンバイク愛好家に大人気だ

立大学の学生さんたちと一緒に開墾して作りました。完全放牧なので、二頭が限界ですが、ここでとれた牛乳は地元の酪農家と東京の農家がコラボして『ギョー』というバターオイルに加工して全国に販売されています。マウンテンバイクのコースは、森林保全と地域おこしを兼ねて仲間と共に麓の神社までの

古道を手作りで整備したものです。『木山HOLLYTRAIL』プロジェクトと呼んでいます。地域おこし協力隊として真庭に來られた自転車屋さん、マウンテンバイクのコースとして盛り上げてくれています。木々の間に見える薨を背に、木山寺の高峰秀光住職（四十歳）は朗らかに話す。活動五年で牧場も古道も店も

中国山地のほぼ中央に位置する岡山県真庭市は、北部はジャージー牛の酪農が盛んな蒜山高原や湯原温泉、南部は木質バイオマス産業の中心地としても知られる。総人口は約四万三千人。だが人口減少が続いており、このままいくと二十年后は三万二千人台と予測されている。けれども近年、その寂しい予測を打ち払うような活気あふれる地域がある。それも山間エリアだ。冒頭の木山寺と、その周辺地域である。中心となって盛り上げているのが、高峰住職と同世代の仲間たちが立ち上げた



岡山県高野山真言宗木山寺
高峰秀光住職の全身全霊

マウンテンバイクが走る牧場や様々な催事も創出する住職の志

過疎化が進む山間部のお寺。全国に同様の窮地は増えているが、その立地をフルに活かした新たな視点でお寺も地域も存続させようと奮闘する青年住職がいる。岡山県真庭市の古刹、高野山真言宗木山寺の高峰秀光住職（四十歳）だ。山上で、二頭のジャージー牛のんびりと草をはんでいる。澄んだ秋空のもと、いかにものどかな牧場そのものの風景だ。だが、どこにでもある牧場ではない。牧場そばの山林をはしる細い古道は、マウンテンバイク愛好家たちで賑わうのだ。落ち葉に覆われた自

然の傾斜は格好のトレイルライド。森閑とした山中に、楽しげな声が響く。レジャーランドのようなだが、ここはれっきとしたお寺である。岡山県真庭市木山の標高四百三十メートルの山上伽藍、高野山真言宗別格本山木山寺なのだ。『木山牧場』はお寺の横の荒地地だった五ヘクタールの土地を、有志の仲間と岡山県

上の写真／高峰秀光住職と
境内の牧場の牛



子どもたちに大人気の手作りの山の基地



ネイチャーゲームで奥山の自然環境を学ぶ

女性が、岡山県を介して紹介されたのが高峰住職の仲間である幼なじみだった。「牧場に必要なのは、幼なじみに思い浮かんだのが、木山寺。境内裏に敷かれた遊休地が

「木山街道マップ」(右頁の写真)を作成。木山街道とは、東の入り口「落合」と、西の入り口「月田」を結ぶ約八キロの広域農道である。マップには、絶景の雲海スポット、地元産のそば粉や野菜を使った蕎麦屋、しだれ桜、ジャージー牛酪農家の手作りジエラトシヨップなどのお楽しみどころ、宿泊施設、木山寺と門前カフェ、山の基地、山麓の木山神社、などが紹介されている。こうした広域の力を得て、保存会

では縁日を開催したり、大晦日には「大晦日オールナイト! 日野上年越し蕎麦祭り」と名付けて、地図にもある蕎麦屋で年越し蕎麦を食べ、木山寺で除夜の鐘、初日の出を拝み、木山神社で初詣といった楽しいイベントも企画。次第に、山間地域に誘われるように、人が足を運ぶようになっていく。こうした活動が、県外ともつながったのが冒頭の牧場だ。きっかけは、国産の「ギー」を作りたいと考えていた東京の

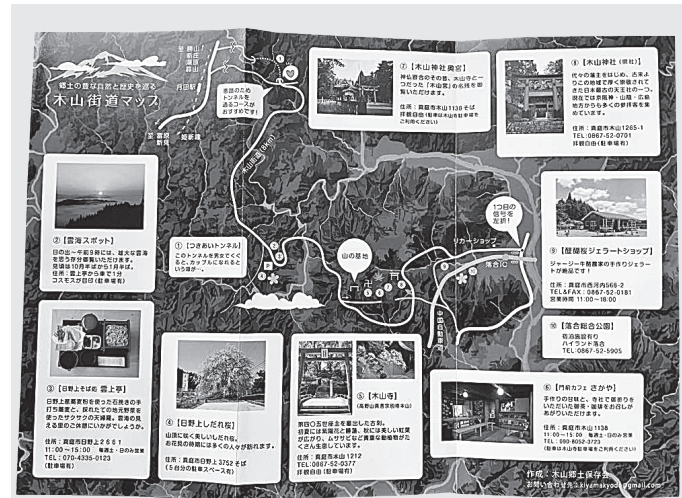
神仏習合の古刹に生まれ育ち

木山寺の創建は平安時代の弘仁六(八一五)年。弘法大師が薬師如来の化身である翁に誘われて建立したと伝えられる。明治の神仏分離までは、山麓にある木山神社と共に「木山宮」として信仰を集めてきた。木山神社は京都祇園の八坂神社の分霊を祀り、古くは「木山牛頭天王」と呼ばれ、その牛頭天王の本地仏たる薬師如来が木山寺の本尊だ。神仏のおわす木山として、九世紀半ばには、鎮護国家の勅願寺となり、毛利や尼子などの戦国武将から諸大名まで尊崇を集めた。木山神社の伝えるところによれば、旧出雲街

らの力をどんどん借りて新たな「楽しい場所」を実現していくところにある。たとえば、保存会が最初に取り組んだのは門前の空き家を改築したカフェ作り。実は、木山寺は最寄り駅のJR姫新線美作落合駅から車で十五分、それも麓か

は険しい山道を登らないといけない。しかも山上にあるのはお寺だけで、お参りに来ても一服する場所もなかった。「地域のコミュニティ・カフェとして人が集まる場になりたいと考えました。でも、保存会にはお金がない。補助金を得るべく、美作地区の地域コンペに応募したけれど落選してしまった。それでも、地元

の工務店さんが賛同して、木材を無料で提供してくださいました。そこで大工さんを講師に招き、ワークショップ形式で、皆でDIYを学ぶ場にながらりフォームしたので。プロから学べ、その技術を、地元で新たなカフェを自分たちで作るために生かせるなんて、面白いに違いない。地域内外の人が参加し、その過程をマスコミも注目。平成二十九年七月のオープンの記念式典には、真庭市長も列席したというからたいした広報力だ。



木山寺とその周辺観光に誘う木山郷土保存会作成のマップ

木ぬくもりの伝わる門前カフェは、週末営業のカフェ、それに、地域住民の学びの場やレンタルスペースとしても提供された。現在はマウンテンバイクの拠点にも活用されている。また、やはり手作り、それも参加型で実現したのが、境内地の裏の雑木林にあるアスレチックジム「山の基地(秘密基地)」(左頁の写真)だ。滑り台があり、ロープを張って滑車を滑らせれば、木々の間をターザンの気分分で抜けられる。子どもの心をわしづかみにするこの基地は、学生が出したアイデアによるもの。

岡山県立大学と真庭市が提携して行う『地域共同演習』という授業があるので、木山郷土保存会の活動を伝えて、学生さんたちに何ができるかプレゼンしてもらったのです。子どもたちが遊べるようなものとして、生まれたアイデアが『山の基地』。必要な資材はこちらで準備して、木山の山を管理している方を講師にお招きし、番線のくくり方も学びました。六日間、合宿して、毎朝、早朝からみんなで作ったのですから僕も元気でした」と高峰住職は笑う。



神仏習合の佇まいを今も残す木山寺は開創約1200年

道には、その信仰の広がりや伝える「木山道」を示す標柱が今も残る。現在、麓から山道を登ると、山上の手前ではっきりと空間が開けて、その奥

に池や鳥居、そして唐破風の重厚な本堂、庫裡が建つ。檀家は約二百三十軒という。高峰住職は昭和五十六年、木山寺の長男に生まれた。姉と妹がいる。

曾祖父は、高野山真言宗元管長で総本山金剛峯寺第四百五世座主の高峰秀海師（昭和六十年遷化）だ。その曾祖父から祖父の故・秀清師の時代に木山の環境は大きく変貌した。昭和三十年代、それまで山中にあった木山神社が山麓に移転。

昭和五十年には、歩いて上がる道しかなかった山道が、車道に整備された。車社会はよくもわるくもお寺の周辺に変化をもたらした。高峰住職は話す。

「昔は近隣の農家が『しろみて』といつて、田植えが終わった頃に豊作祈願をかねて寺社に参る習慣がありました。寺社にお参りして、観光して帰るというちよつとした小旅行だったみたいです。木山寺と木山神社もそうした場所で、以前は山中に旅館が三軒、民家が三十五軒ほどあったそうです。でも交通の便がよくなると、泊まらず、日帰りで帰るようになりしました。僕が生まれた頃は雑貨屋も旅館も全部畳まれ、民家も四軒でした」

祖父の秀清住職は、教員と兼職しながら大伽藍を支えた。年中行事の新年祈祷会、柴燈護摩、節分会と星祭、秋祭り、七五三祈祷会に加え、毎月四回の月例祭それに八月の盆明けの週末には「夏季大学」として、各界の名士を招いて講演会も開催した。

高峰住職の父親である秀章師も兼務寺

の住職をしながら、木山寺を手伝っていた。順当にいけば、祖父から父、そして自分がお寺を継ぐことになるのは子ども心にも感じていた。だが、こう振り返る。「中学生の時に得度はしたけれど、全然、お寺を継ぐ気はありませんでした。中学卒業後の進路も父が勝手に高野山高校を専願で出していたけれど、それも断つて、地元の県立高校に進学したんです」

状況が一変したのが高校一年生の時だった。秀章師が病で急逝されたのだ。数えの四十八という若さだった。既に住職である祖父は高齢だ。秀光少年も覚悟を決めた。高校卒業後、高野山大学に入学。ただし一年休学して専修学院へ入り教師資格を取得することに。それでも、意外や、楽しかったと話す。

「当時、高卒で専修学院に入ったのは僕ともう一人だけ。どこにいても可愛がつてもらえました」と笑顔で振り返る。

高野山大学在学中に出会ったのが、後に伴侶となる愛さんだ。四回生の頃には、愛さんの実家から通学していたというか

ら、両家も認める仲だったのだろう。愛さんと共に故郷の木山寺に戻ったのは二十三歳。四人の子どもを授かった。でも、そこから大変だった。

檀家にお寺を知ってもらいたい

お寺に戻った頃、祖父の秀清住職の体調は思わしくなかった。そうしたなかで懸命に孫を育てようと思われたのだろうが、ことあるごとに衝突したと振り返る。「祖父は厳格で生真面目。お供え物をして、歪んでいたら、後からついて回って直すような人でした。ケンカばかりしていました」と高峰住職は苦笑い。



老若で賑わった花法要の寺フェス



月1回は「阿息観の集い」を開く

期がありました。独身だったから逃げていたと思う」

それでも、なんとか平成二十二年三月、住職晋山ならびに客殿屋根葺替修繕落慶を無事に終えることができた。お寺に帰って六年目。二十九歳になっていた。でも落ち着き始めたその時、

お寺も重要な局面にあった。客殿の屋根替え事業だ。檀家の寄付を得て、七千万円近い大事業だった。

「当時はオリンピックで銅板が高騰していた時期。ところが、業者のずさんな見積もりで一から見積もりをし直さなければならなくなった。しかもその最中、僕がお寺に帰ってから二年で祖父が亡くなってしまったんです。自分自身も全体が見えていなかった頃で、総代さんとのつき合い方、距離感もつかめない。なかなか事業が定まらず、大工さんとも折り合いが悪く板挟み状態。目の前のことをこなすのに精いっぱい、すごく悩んだ時期がありました。独身だったから逃げていたと思う」

それでも、なんとか平成二十二年三月、住職晋山ならびに客殿屋根葺替修繕落慶を無事に終えることができた。お寺に帰って六年目。二十九歳になっていた。

でも落ち着き始めたその時、

青年住職の胸にもたげてきたのは、危機感だった。修復はできたけれど、周辺は過疎化が進む。檀家との距離感も気がかりだったという。

「祖父は教員だったこともあり、それまではちょっと敷居の高いお寺でした。お寺で葬儀や法事をするのもなかったの、檀家さんであつてもお寺に上がれることはほとんどなく、住職との付き合いも薄かった。お寺に興味のない檀家さんがどんどん増えている。何かしないと、お寺の今後にも興味を持ってもらえない。それは僕自身のためでもありません。お寺に帰ってから仕事ばかりで自分自身がしんどかった。とにかく楽しいことを皆で共有したいなと思ったのです」

それでまず始めたのが、檀家を対象にした「お寺の勉強会」だったそう。

「本堂を見てもらったり、いろんな宗派の話や茶話会みたいにして話したりしていたのです」

り入れた。寺報も発行し、法事の案内も出すようにした。勉強会には常時、十人から二十人ぐらいが参加するようになった。でも手づまりも感じた。山の上だけに、高齢者にはお参りしづらい。広く多くの人に関心を持ってもらうにはどうしたらいいのか。毎日、一人で悩んでいた。

奥山から考える持続可能な社会

転機となったのが、平成二十八年の開創千二百年事業だという。木山寺と木山神社は開創千二百年を期して、記念事業を開催。それに向けた動きのなかで、新たな視点と交流が生まれていく。それは、人々のなかで、地域の中の「木山」を見つめ直すことにもつながっていったのだ。アクションを起こしたのが、次代を担う若い世代だった。高峰住職は振り返る。「同じ山をそれぞれ管理しながらも、明治の神仏分離から、先代の頃までは木山神社と交流がほぼ途絶えていました。でも開創千二百年事業の時に、お寺にも神社にも研究者の調査が入ったんです。そ

れで、調査の一環で神社とも交流が生まれた。ちょうど神社も代替わりして若い禰宜さんになられ、とても活発で、バンドもされているような方なんです。すぐに、一緒に何かやりましょうと」

お寺も神社も地域と共にある。危機感と同じだったというわけだ。

もう一つ、高峰住職に呼応してくれたのが地元に残る同級生だった。自分たちの住む地域をなんとかしたいという思いは、年配者以上に切実なものがあつたに違いない。最初に立ち上げたのが、「木山寺プロジェクト」で、木山寺を拠点に、誰でも参加できるワークショップ「大人の木山寺」を定期開催。数珠作りやヨガ、阿字観（阿息観）などを次々に企画した。古刹で突如、始まった楽しいイベントは新聞にも取り上げられ、注目を集めた。リピーターも現れ、やがてそうした人々のつながりのなかから、次の動きが生まれしていく。それが、お寺という枠を超えた「木山郷土保存会」なのだ。こう話す。「何か企画してもお寺だけでは告知が難

しい。お寺だと補助金も使えず、行政とつながりで何か行うのも難しいなと感じました。でも、他と手を取り合わないとなら続かない。それなら、お寺という枠を超えて保存会という形で動こうと」

活動のキーワードが「里山」ならぬ、「奥山」という。高峰住職は振り返る。「このあたり一帯は郷土自然保護地域。皆でこの木山を持続させていくために、こういうコンセプトが考えられるかと話し合っていたんです。数年前に、『里山資本主義』というのが話題でしたが、ここは里山でもないしねと。そこにまたま野生動物の調査士の方が来られ、『これからは里山も大切ですが、奥も綺麗にしたいじゃないか』と話されたんです。——どういふことなのか。」

「里は動物と人間の境界のような場であるけれど、奥山に動物が住めるところをしつかりと作っていかなければいけない。このあたりは植林の山ですが、間伐もきちんとして、水源地もきれいにする。そのことが、里も結果として住みよくして

いく。お寺と神社のある木山は、ちょうど奥山と里山をつなぐエリア。そのフィールドを生かして、足を運んでもらうことで、SDGsではないけれど、山から里に広がるような持続可能な社会を探っていくのではないかと考えたのです」

による「旅僧まにわ」も動き出した。一般社団法人真庭観光局とタイアップし、お寺の活用と地域活性化を目指す。地域の空き家を活用した空き家プロジェクトも構想中だ。

任せながらお寺を開いていく

さて現在、コロナ禍もあり、少し活動は停滞しているが、次なる取り組みも動き始めている。一つに、境内の新たな拠点「シェアハウス」だ。古民家を改築し、宿泊もできる。

「お寺を気に入り、しばらく逗留したいという青年もいます。無料で泊まってもいい代わりに、お寺の仕事を手伝ってもらうようなかたちでできればいいでしょう。アーティストが作品制作のために使ってもらってもいいなと考えています」

真庭市内の宗派を超えた僧侶有志の会

「過疎地である以上、お寺を続ける上で、新しい風を吹かさなきゃいけないのは自明のことです。その選択肢をどれくらい自分のなかで持てるかは重要だと思う。持てるほどに、こんなことができますとたえず発信することで、周囲の関心も持続できると思うからです」

もちろん経済的な課題もある。伽藍もいざれ修復が必要になるのは目に見えている。正直、寄付を募るのは難しい。ただ、それでも今、お寺ができることはあると考えている。高峰住職はこう話す。「実は僕らの活動は、中高年世代にはいま一つピンとこないようです。費用対効

果で考えれば、『楽しさ』を前面に出す僕らの活動は何をしているのかよく分からない。お寺イコール寄付というイメージが強いけど、見て見ぬふりはあるかもしれない。でも、これからの世代は違うのではないかと感じています。自分たちの先祖から未来につながるのをお寺のだと青壮年の方ほど、案外、素直に受け取られているような気がするからです」

かわり続けてもらうには「楽しさ」と「任せる」ことが大事だと考えている。「楽しいところに人は来る。かわるうとしてくれた人には、任せる。任せられたら相手も頑張る。こつちも負担は減る。自分もしんどくならないですよ。誰でもお寺を使えるようにしたらと思えばいいんです。だから、お寺のためになるのなら何でもやるんです」

そう笑顔で話す高峰住職。「最近はどうも執着がなくなった」ともいう。肩の力の抜けたその姿が、お寺の可能性を、いや仏教の可能性をも、無限に開いているように感じられた。